
バレンタインの思い出

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタインの思い出

【著者名】

山口多聞

【あらすじ】

工藤新一の息子と灰原哀の娘が20年後の世界のバレンタインに繰り広げるドラマ。

(前書き)

バレンタインの思い出

作山口多聞

人物設定 小嶋瞳 帝丹小学校二年。小嶋元太小嶋（旧姓吉田）歩美の娘。外見、性格ともに歩美の小学校時代そっくり。

その他のキャラクターは、名探偵コナン本編登場キャラクター、及びBLUE-WING!!管理人のkito様創作の小説のキャラクターを許可を得て使わせて頂きました。詳しくはこちら
<http://bluewing22.fc2web.com/>

20XX年2月11日

帝丹小学校脱靴室

「あれ、おかしいな。」

この日、2年生の工藤勇人は下校の準備を終え、いつもどおり幼なじみといつしょに帰ろうとしていた。所が、その幼なじみの姿が見えなかつた。

「どうしたの、江戸川君、じゃなかつた工藤君。」

困っている彼に、この学校二十年のベテラン教師で今は副校長である小林先生が声を掛けた。かつての若々しさはさすがにないが、かわりに今は頼れるお母さんといった雰囲気をかもし出している彼

女は、生徒や教師、父兄からも厚く信頼されていた。そして、時々かつての教え子であつた江戸川コナンと瓜二つの彼を間違えて呼ぶ。最初の頃は文句を言つていた勇人であつたが、今はもう慣れてしまつていた。

「あ、小林先生。希見ませんでした？」

「え、ああ円谷さんね。さつき大急ぎで走つていったけど。」

「え！ 本当ですか？」

素つ頓狂な声をあげる勇人。

「ええ。」

勇人の叫びに驚きつつ、小林先生はそう言った。その言葉に、勇人は俯く。

「どうしたの工藤君？」

表情を暗くした彼に、小林先生は心配そうに声を掛けた。

「先生。実は希のやつ、ここんとこずつと一人で先に帰っちゃうんだ。俺何か悪い事したかな。理由を聞いても言つてくれないし。」

「本当に？ 工藤君なんにも心あたりないの？」

小林先生の問いに、勇人は頷く。

小林先生も首をかしげた。勇人と希の二人といつたら、卒業した優輝と藍、秋と鈴の再来と言われるほど仲が良く、お似合いのカップルで有名だ。その二人の間に、特に何の理由もなく亀裂が発生するのはどう考えててもおかしい。

小林先生は希が勇人を避ける理由を考えてみた。だいたい女の子が男の子を避ける理由といつたら何か知られたくない事がある時だ。そこまで考えて、小林先生はふと今日が何日であるかを思い出した。

今日は2月11日。つまり3日後は2月14日である。そこから小林先生が導き出した答えは1つであった。

「なるほど、そういうわけか。」

小林先生のその言葉に、勇人は驚きながら聞いた。

「え、わかったの先生？」

「ええ。ははん、さすがの名探偵君も判らないか。」

どうやら工藤家の男というものは色恋沙汰に鈍感らしい。しかも、自分の。

「じゃあ教えてよ。」

「だめ。それは君自身で考えなさい。」

そう言い残して、小林先生は行ってしまい、後には勇人だけが取り残された。

勇人は帰る途中ずっと考えつづけていた。しかし、中々答えを出せずについた。

「畜生。何で小林先生にはわかつて、おれにはわからねえんだ。」

そう言いつつ頭を抱える勇人。そんな彼の目に、コンビニの駐車場に建てられた旗の文字が飛びこんできた。

旗には、カラフルな文字で、『間もなくバレンタイン』と書かれていた。一時期は廃れかかったバレンタインデイであつたが、お菓子メーカーのプロジェクトXなみの努力によつて、日本のイベントとして残る事が出来た。もつとも、趣向が手作り主流になつたため、メーカーの売上が落ちた事に変わりはなかつた。

「バレンタインか。」

そう呟き、勇人は去年のバレンタインを思い出す。

去年のバレンタインといつたらそれはもうすさまじいものであつた。以前から袋一杯のチョコを持つて帰つてくる兄達の姿を見て育つた彼であつたが、あくまでそれは他人事と思つていた。しかし、現実は彼の予想を大きく裏切つた。

一年生であつたにも関わらず、彼の元に袋一杯分にならうかというチョコが彼のもとに届いたのだ。同級生だけではなく、上級生からも結構な量が届いた。あの工藤家の二男にして容姿端麗、音楽を除

く全ての教科は最優秀で推理力も兄顔負け、それでもってサッカー や格闘技も出来るのだから彼の人気が低いはずがない。

それらのチョコを持つて帰つて母親の蘭に見せたら。

「こういうことでも血は争えないわね。」

と言われた程だ。しかし、彼にとつてはそれ以上に深く心に残つたのは、希の悲しそうな表情だった。

希も去年、勇人にチョコを渡したものの、そのチョコは市販の物で、他の女の子達が勇人に渡した物（さすがに小学校低学年では手作りは難しいらしい）と大差なく、結局多くのチョコの中にうずもれてしまつたのだ。

勇人はちゃんと分けなかつたのを後悔したが、時既に遅しであつた。

その苦い思い出が彼の脳利をよぎつた。それと同時にある思いが心の中に浮かんできた。

今年、希からチョコをもらえるかは最近の希の態度から見て微妙な所であつた。しかし、彼はこの時、ある決意を固めたのであつた。

一方その頃希はとこうと

「……でそこはそうするの。判つた希ちゃん。」

「うん、ありがとう鈴おねえちゃん。」

例によつて工藤邸にいた。

彼女は真剣な眼差しでメモを取つていった。教えてもらつてゐる相手は勇人の姉の工藤鈴だ。そして、何を聞いているかというと、賢明な読者なら既にわかるであろう。そう、チョコレートの作り方だ。「どういたしまして。それにしても希ちゃん偉いわね、その歳で手作りチョコを勇人あげようなんて。何かあつたの？」

そう鈴が言つた途端、希の顔が真つ赤になつた。

「べ、別に訳なんて。ほ、ほら、私勇人から誕生日プレゼントに手作りの物もらつたからそのお返しと思って、ただそれだけ。」

そう言つて、希は手に付けていた貝のブレスレットを見た。だが、それだけではないのは一目瞭然だ。ただ鈴も同じ女である。それ以上は何も言わなかつた。

「ふーん、そう。それよりももう行かなくて良いの？早くしないと勇人帰つてきちゃうわよ。」

鈴が時計を見ながら希に言つた。

「あ、そうだつた。じゃあね、鈴お姉ちゃん。ありがとうございます。」「うん、希ちゃんも頑張つてね。」

鈴に見送られながら、希は帰つていつた。

「全くあの歳で。一人ともマセてるわね。でもまあいいか。さーて、私も頑張らなくちゃ。」

そう言つて、彼女は台所に向かつたのであつた。

一方出ていつた希はといふと。

(今年は勇人に、他の人にはあげられない物をあげてみせる。)と心の中で思つていたのであつた。そう、ここ最近勇人を避けていたのはこの事が勇人にばれない様にするためであつたのだ。そして幸いにも、この後も14日まで、勇人に希がしていきたことはばれなかつた。

そして運命の2月14日

午前七時 帝丹小学校

「ふふふ。勇人君に私のチョコを最初に食べてもらつんだ。」

普通(この日は偶然にも開いていた)なら先生さえまだこない早晨に、カチューシャが良く似合つ少女が大事そうにチョコ(ちなみに手紙つき)を持ちながら登校してきた。

この日、2年生の小嶋瞳こじまひとみは例になく早起きして登校していた。余

りに早い彼女の起床に、母の歩美と父の元太は目を丸くした程である。

その目的は、工藤勇人の下駄箱に、最初にチョコをいれるためであつた。

そう彼女は勇人が好きだつたのだ。母親がコナンを好きだつたようだ。

どうやら、すきな男のタイプは母親から遺伝したらしい。
そしてお皿当ての下駄箱に向かう。

「ええと、勇人君の下駄箱はここか、って、え？」

下駄箱を見つけた途端、彼女はそう言って、手からチョコを落とした。

そこにはこう書いた張り紙がしてあった。

『チョコいれるのお断りします。工藤勇人』

「そんな！」

彼女は叫びながら崩れ落ちた。

初恋が玉碎するのもどうやら遺伝したらしい。

その後、いつもどおり登校してきた勇人であつたが、なんと彼は自分の机にも同じ張り紙をして、チョコを机に入れられるのを防いでいた。

さらに、チョコを直接持ってきた同級生と下級生には。

「ごめん、俺も来ないんだ。」

と謝り。上級生には。

「ごめんなさい先輩。僕どうしてももう説にはいかないんだ。」

と謝つて受け取りを完全に拒否した。

とにかく、この日勇人は全てのチョコを断つたのであった。

もちろん、これによつて彼の評判（主に女子）ががた落ちになつた

のは言うまでもない。

男子からも、『うぬぼれやがつて』とさんざん言われた。しかし、勇人はそうなる覚悟をあらかじめしていた。大事な人のためならと思つて。

そして夕方

勇人は下校の仕度を終え階段を降りていた。図書室で調べ物をしていたため、少しいつもより遅くなつてしまつていた。

結局この日、希は彼にチヨコを渡さなかつた。

「やっぱ嫌われちまつたのかな、俺。」

真剣にそう考へてしまふ勇人であつた。だが、彼を驚かす事態が脱靴室で待つっていた。希が脱靴室に一人立つていたのである。その姿に驚く勇人。

「か、希！どうしたんだ、今日は早く帰らなかつたのかよ。」

「うん。今日は勇人に渡したい物があつたから。」

そう言つて、希は持つていた包みを彼に見せた。

「え、それつてまさか。」

「そう、チヨコレート。直接誰にも邪魔されず渡したかつたの。ごめんね勇人遅くなつちゃつて。」

「いいよ、そんなこと、謝らなくたつて。けどこれつて。」

そう言いながら包みをまじまじと見つめる勇人。明らかに市販の物ではない。

「おいしくないかもしけないけど。」

小さな声でそういう希。

「ま、まさか！お前の手作り！？」

勇人の叫びに、希は恥ずかしそうに首を縦にふつた。

この瞬間、ここ数日間さんざん勇人を悩ませ続けた疑問が全て氷

解した。どうして希が早く帰ってしまったのか、どうして自分を避けていたのか、その答えがそこにあった。

「もらってくれる？」

不安そうに言う希。

「え、なんでそんな事聞くんだよ？」

勇人が不思議そうに聞き返した。

「だつて、勇人皆のチヨコ断つてたから。」

その希の言葉に、勇人は笑顔になつて言った。

「ああ、あれか。あれは今年は一個しかもらいたくなかったからだよ。」

「え、それつて！？」

希の顔が真っ赤になつた。勇人は1個しかもらわないつもりでいた。そして希が渡そうとしているのはもらつてくれると言つていて。つまり、それは。

「そう、お前からしかもらいたくなかったんだ。去年みたいに、お前の悲しい顔見るのはごめんだからな。」

勇人も真っ赤になりながらそう言つた。

「ありがとう、勇人。」

目を潤ませながら希はそう言つた。

「ば、バーロー泣くなよ。それよりさ、これ俺だけが食べちゃ勿体無いから、一緒に家に帰つて食べないか、紅茶でも飲みながら。」

「うん。」

勇人の言葉に、希は極上の笑顔で返した。その表情に心臓が高鳴る勇人。

「じゃあ帰ろうぜ。」

そう言つて勇人は片手をさし出す。希は無言で自分の手を彼の手につなげた。

二人は仲良く下校の途についた。

ちなみに二人はこの時、誰にも邪魔されなくてよかつたと心の中で感謝していた。

この後、二人が工藤邸にて楽しくお茶を飲みながらチョコを食べたのであつたのは言うまでもないことである。

翌日

勇人と希は久しぶりに、一人そろって登校していた。ところが、学校についた途端、偶然あつた小林先生にこう言われ、二人は大いに衝撃を受けることとなる。

「おはよう。工藤君。円谷さん。その様子だと仲直りできたようね。それにして本当に一人とも仲が良いのね。工藤君、昨日ああしたなら、円谷さんをしつかり守つてあげるのよ。」

「え！」

驚いて顔を真っ赤にする2人。

実は、一人は気づいていなかつたが、あの場にいたのは一人だけではなかつたのだ。2人の人間に見られていたのである。

目撃者1 K先生の証言

「本当に工藤君とても男らしかつたわ。小学校一年生とはとても思えない。それに円谷さんも顔を真っ赤にしちやつてとても可愛かつたわね。」

田撃者2 2年生のH・Kさん

「うわーん！！悔しい。まさかあんなに勇人君と希ちゃんが仲いいなんて。けど、瞳負けないもん。」

このお二人を震源地に、この時の話はまたたく間に帝丹小学校中に広がり、再び勇人の株を盛り上げることになる。しかも、前以上に。

これが原因で、2月後半の勇人と希のファンの数は先月比2倍になつたという。

＜完＞

あとがき

この作品は2月1~4日に構想したものです。当初は余りに多いバレンタインのチョコに困る工藤邸の話を書こうと思いましたが、勇人と希のキャラが中々よかつたので、使わせてもらいました。ただ事後承諾になつてしましましたが。

小嶋瞳は小嶋元太と吉田歩美の子供といつもちろん架空の設定です。今回は彼女に妨害キャラ（？）

になつてもらいました。ちなみに勇人達と同じクラスという設定です。ただ、希を好きな男の子の妨害キャラがどうしても考えつかなかつたのはお許し下さい。

そして、キャラクターを使う事を許可して下さいましたk・e・t・o様。本当に感謝しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4824a/>

バレンタインの思い出

2010年10月10日15時38分発行